

II・愛着とそころのはぐくみ

# 行動障碍と愛着形成

— 激しい器物破壊行動を示す成人自閉症者への援助

小林隆児

東海大学健康科学部社会福祉学科

原鉄男

社会福祉法人ふじの郷さつき学園

はじめに

本稿で筆者らに与えられたテーマは成人期に達した発達障碍の人々に認められる臨床上の諸問題において、愛着の問題がどのようにかかわるかを具体的な事例を通して論じることにある。

一般に、発達障碍とは、子どもの発達途上で出現する障碍で、その障碍が生涯にわたってなんらかの形で持続し、その基盤には脳の機能障碍が想定されるものと見なされている。

たしかに定義上はそうなっているのだが、なぜ「(精神)障碍」ではなく、「発達障碍」なのか、肝心かなめの「発達」ということに

ついてどう考えるかが曖昧なままに、これまで発達障碍の臨床問題が論じられてきたように思われる。

発達障碍にみられる臨床像が発達過程で多様に変容していくことは、経験的には、だれもが認めていることである。すなわち、発達障碍にみられる現在の症状(障碍)の大半は、過去から現在に至る過程で形成されてきたものであるとともに、将来にわたって改善したり増悪したりする、つまりは変容していく可能性があるということである。

しかし、それらの臨床像がどのような過程で生み出されてきたものなのかという肝心なところになると、ほとんど明らかにされてい

ない。

「発達」とは、日々の生活の中で養育者をはじめとする多くの人々との交流の蓄積の中で展開していくものであって、発達障碍をもつ人々の場合も例外ではない。

しかし、発達障碍の臨床研究にかかわっている者たちの多くは、彼らの生活のほとんどの部分については直接関与することが現実的に困難であるとともに、狭義の臨床の場という非日常的な空間の中でしかかかわっていないという大きな限界性を抱え込んでいる。つまり、「発達」のありようを直接的に、あるいは継続的に関与しながら観察するということが非常に困難だということである。発達障碍の臨床研究の最大の困難さは、ここにあるように思う。

そのような限界性の中で現実に実施されている多くの研究では、発達障碍の人々に現時点で認められる臨床像あるいは種々の障碍(像)に関するデータとなりがしかの理論的仮説をもとに、発達障碍の病因ないし成因に迫るという手法がとられやすい。実際にその発達過程そのものをきちんと把握し検討するという研究は、きわめて乏しいといわざるをえないのが現状である。

そこで本稿では、これまでになれわれが実践してきた臨床活動の中から、激しい行動障碍を呈して施設入所となった成人期自閉症の

一例を取り上げてみたいと思う。入所施設での援助活動は、職員が彼らと日々の生活とともにしながら遂行される臨床実践であるが、このような援助過程を通して初めて、われわれは発達障害にみられる種々の病態（症状）の変容過程を捉えることが可能になるのではないかと思われる。

発達障害、とりわけ対人関係障害を中心の問題にもつ自閉症をはじめとする広汎性発達障害においては、乳幼児期早期に子どもと養育者のあいだでなんらかのボタンのかけ違いが起こり、そこにかかわり合うことのむずかしさ（関係障害）が生まれ、それをもとに対人交流が蓄積されていくことよって、関係障害は拡大再生産され、その結果、子どもにも多様な障害がもたらされていく。つまりは、土台が育ってその上に上部が組み立てられるという一般の発達の動きが阻害されているのである。

発達障害にみられる多様な行動障害や症状がそのようにして生み出されていると考えるならば、まずはそのもととなつている関係障害の悪循環を断ち切り、関係の修復を図ることが援助の当面の目標となる。それは愛着形成を基盤にした関係づくりを指すということである。

このような理念のもとで行われた援助実践を通して、行動障害が生まれる背景、さらに

は愛着形成のもつ意味について考えてみよう。

### 事例紹介

〔事例〕D男（入所時二四歳）。

〔主な行動障害〕器物破壊、パニック、嘔吐、自傷。

〔知的発達水準〕中等度精神遅滞。

〔家族構成〕両親と兄の四人家族。

〔発達歴〕胎生期は特に問題はなかった。

出産に二四時間かかり、体重も二三三〇グラムと少なかつたが、生まれた直後に元氣よく泣いたため安心していたという。昼夜問わずよく泣き、あまり眠らない子だった。三歳頃、激しい多動や、しゃべらない、目が合わないといった症状に母親は不安を感じ、某病院を受診した。そこで自閉症と診断され、その後県立病院を受診した際、その医師から「この子はもう駄目だから、お兄ちゃんにかけなさい」と言われ、母親はひどくショックを受けた。

保育園に入ると同時に、市が主催する子どものことばの教室に通い、ほどなく片言でも単語などを使いコミュニケーションが取れるようにはなつた。保育園では、多動で偏食も激しく、ほとんど物を食べる事ができなかった。小学校では一年生から三年生までは普

通学級に通い、四年生からは特殊学級に通つた。一年生から三年半の間、ある施設にも通い、そこでマラソンをやったり、嫌いな牛乳を無理やり飲まされたり、正座をしたまま動かないように指導されるなど、非常に厳しいスパルタ式訓練を受けた。

中学校は全寮制の養護学校の分校に通つた。中学校を卒業後、四年間施設に入所した。この頃までは大きなトラブルや問題行動、パニックはなかった。

二〇歳から四年間、父親が関係していた授産所に通つたが、担当の指導員が不慣れであったためか、通い始めて三日目からパニックを起こすようになった。突然部屋から飛び出し、集會場で大きな声を出して花をむしる、窓ガラスを割るなどの破壊行動がみられるようになった。当時D男は、やることなすことすべて否定され、何をしても怒られていたという。その後、その指導員が三ヶ月で退職するとパニックは減つていった。しかし、その頃から父親との折り合いが悪くなり、家庭でもパニックを起こすようになったため、現在入所している施設に二ヶ月間の短期入所を試みた後に、正式に入所となった。

以下に述べる援助実践は、自閉症者専門の入所更生施設さつき学園の職員が協働して取り組んだものであるが、報告は本事例を主に

担当した共同執筆者（原）によっている。なお、ここでの記述は「です、ます調」となっているが、原氏の援助活動を考えた時、このような文体のほうが相応しいと考えたからであることを最初にお断りしておきたい。

### 援助過程

#### Y年五月（初来所）

Y一二年のことです。父親が障碍者についての勉強会に出席した後からD男さんに対する態度が急に厳しくなりました。その頃からD男さんは「オオサン怖イ」と言うようになり、父親の動きに敏感に反応し、必要以上に父親の後ろをついてまわり、父親が帰ってくると必ず玄関の戸を開け閉めするなど、父親に対して異常なほどに気を遣うようになっていきました。

Y一一年の夏、D男さんは父親とのテレビのチャンネル争いが原因で、家中のガラスを割り、次いで家から飛び出し隣の家のガラスを割る、という破壊行動を起こしました。

それ以降、父親との関係が悪くなり、パニックが頻繁におこるようになりました。家と授産所の往復の際、突然車から降りて近くの家のガラスを割りに行ったり、タオルやシートを破いたり、頭をげんこつで叩いたり、自分の手首を噛むといった自傷もみられるよう

になりました。そして、Y年一月頃からそれまでまったく見られなかった母親への「べたべたした甘え」の行動が見られるようになってきました。

Y年のゴールデンウィーク中に、家族で旅行に行った際、D男さんは旅館に持っていった自分の傘と一緒に、旅館先にあつた他人の傘をたくさん持ち帰ってしまいました。そのため父親は持ち帰ってきた傘を全部返したのですが、これが引き金となってパニックが起きました。返却した傘の中にD男さんの大切な傘も入っていたことに父親は気づいていませんでした。

その後、D男さんは頻繁にパニックを起こすようになります。そのパニックを父親と兄で押さえてもなかなか落ち着かせることができなくなり、家庭での生活が困難になったため、D男さんは両親と共に相談のため来所し、そのまま短期入所となりました。しかし、両親はD男さんを施設に連れてくる時に、D男さんにまったく事情を説明していませんでした。短期入所となった最初の日の就寝時に、D男さんは初めて両親から「今度からここで働くことになったから」という話を聞かされただけだったのです。

#### Y年五月（短期入所）

二カ月の短期入所の期間中、家庭での激し

いパニックが嘘のようになくなり、決められた活動に比較的従順に参加し、周囲に合わせず振る舞う行動が目立っていました。

その中で印象的なことがありました。食事のときのことです。D男さんは食事の直後に大量の水を飲み、すぐさまトイレや洗面所まで走っていき、吐くのです。そんなことがたびたびありました。どうやら嫌いな食べ物無理やり食べ、それを吐き出すために大量の水を飲んでいたようです。またある時は食後に床をじーっと見ていることがありました。

「どうしたの？」と聞くと、小さな声で弱々しく「オオタ（落ちた）」とつぶやきました。D男さんは毎食後に薬を服用しているのですが、その際自分で薬の袋を破り手の平に薬を出したとき、一粒落としてしまったらしいのです。その弱々しくつぶやく声は、何か失敗してしまったことを自分自身で責めているかのように私には聞こえました。

このような出来事から、D男さんは過去にかなり厳しい生活訓練やしつけを受けてきたのではないかと想像されました。

#### Y年七月（入所）

しばらく食後の嘔吐は続いていましたが、次第に嫌いな物は残せるようになり、八月の後半には嘔吐は見られなくなりました。D男さんは施設内では走って移動することが多

く、よくよく見てみるとそのコースも決ま  
っているようでした。職員との視線は合いに  
く、表情には変化がなく、その顔からは生命  
感が感じられませんでした。

七月の上旬までずっと同じ長袖の服を毎日  
着ており、それ以降、半袖の夏物の衣類に替  
わりましたが、今度はその半袖の服を毎日身  
につけ、着替えることはありませんでした。

この衣替えの時、女性職員と「夏は暑いぞ  
ー。そんな服は脱いじゃえー」と遊びの感  
覚で着ていた服を脱がせると、すんなり受け  
入れて着替えていました。いつもは視線が合  
いにくく、表情にも変化が感じられませ  
んが、こんな時には嬉しそうな表情を見せ、相  
手の目を見ていたそうです。

作業活動やその他の施設での生活には従順  
に参加し、それらの活動を行う時にはD男さ  
ん特有の手順で行っていました。

家庭でもパニックはなく、母親は「あの頃  
の、あの荒れ方はいったい何だったのだろう  
と考えさせられるくらい穏やかな状態です」  
と話していました。

Y年十一月(集団に合わせた行動がむずかし  
くなる)

この頃からD男さんは作業活動では集団に  
合わせた行動ができなくなり、D男さんに対  
する職員の指示や制止の声が増えてくるよう

になりました。散歩に行くとき集団から一人抜  
けだし、職員の制止を振り切って先にとんど  
ん行ってしまったり、缶つぶしの作業では、  
皆と一緒に休憩も取らず、一人で機械を使  
って自分のペースを崩さず、活動時間いつば  
いまで作業していました。

そして次第に午前の散歩には参加しなくな  
り、施設内に残って洗濯をすることが多くな  
ってきました。何度も着替えては洗濯し、タ  
ンスの中のきれいな衣類も、すべて洗濯する  
ようになってきました。

そんなある日の昼食時のことです。集団で  
の行動がむずかしくなってきたD男さん  
が、皆よりも少し早めに食堂に来て配膳を  
し、食べようとすると、厨房職員から「男の  
子はまだだよ」と制止されました。するとD  
男さんは近くのガラスをガンガンと叩きまし  
た。その行動を目にした厨房職員は、「あ  
ー！ そんなことをして！」とさらに注意を  
しました。その直後です。「ギヤー!!」とも  
のすごい大きな叫び声を出しながら、手と自  
分の履いていたスリッパで、窓ガラスを粉々  
になるまで叩き続けました。これが施設での  
初めてのパニックでした。

この時のパニックは、厨房職員に制止され  
たことも誘因だと思われませんが、それ以上  
に、その職員の声の不快感に強く反応  
し、過去の嫌な出来事も想起されて、激しい

パニックになったように思われました。その  
後も食堂で、その厨房職員が他の利用者に注  
意をしている声を聞いては同じところのガラ  
スを叩く、ということがありました。

家庭でも洗濯することが多く、一度施設へ  
持っていった持ち物、シャンプー、歯ブラ  
シ、ひげ剃りなどを捨てるようになりまし  
た。母親は、以前D男さんがパニックをよく  
起こしていた時、家で使っていた電化製品な  
どを捨てていたことを思い出し、D男さんと  
楽しく言葉遊びなどをして過ごしていても不  
安になることがある、と話していました。

Y十一年二月頃(パニックが頻繁に起こるよ  
うになる)

「ウワァー!!」と、突然大きな声を出し、  
カーテンを引きちぎったり、タンスの引き出  
しを放り投げてガラスを割ったり、利用者の  
持ち物を床に叩きつけて壊してしまうような  
パニックが頻繁にみられるようになりまし  
た。しかし、その前兆も原因もわかりませ  
んでした。そしてきまって「コワイ、コワイヨ  
ー、オコラレタ、コワシチャッタ、ゴメンナ  
サイ」などと、救いを求めるかのようにつぶ  
やいていました。

そんな時は、抱っこして「D男くん、部屋  
へ行こう」と話すと、すんなり部屋へ行き、  
そこで抱っこしながら一緒にいると、だんだ

んとD男さんの体の力が抜け、職員に身を預けるようになり、落ち着いていきました。部屋へ行き、私に抱っこされることなくD男さんがベッドに潜り込んでしまうようなときでも、私がそーつと布団の中に手を入れD男さんの手を握ると、D男さんのほうから軽く握り返してきました。しばらくそーつと一緒に過ごし、「もう大丈夫？」と声をかけると、私の手を離し、大丈夫だという気持ちも伝えてくれました。そんな姿を見ると、自分一人では大変で困っていて、職員が来てくれるのを待っていたように思えました。

その後も色々な物を次々と壊しましたが、人に危害を加えるようなことはありませんでした。それまではD男さんのパニックの時、女性職員もD男さんを抱っこすることもありませんでしたが、そのうちに抱っこしてもその手を振りほどき、再び物を壊すようになり、男性職員が対応するようになっていきました。次々と物が壊れました。ガラスを割る、鏡を割る、服や布団を爪切りや歯で破る、時計、ひげ剃り機、CDデッキなどなど。D男さんはそのようにして物を壊してしまっただけでさらに自分自身が傷ついているように見えました。ですから私は物を壊す前に止めてあげなければと思うのですが、できませんでした。

家庭でも、D男さんは帰宅した時に家電製

品や食器を破壊し、自分の衣類を引き裂き、家具は倉庫に片づけさせるといふ徹底ぶりでした。この時母親は、「D男に対して冷静さを装い、明るく振る舞っているつもりだが、なかなかできない」「おどおどしたり、不安な気持ちでいっぱいだった」と話していました。

施設では、D男さんのこのような状態に対して、同室の利用者との緊張も考えられたので、その利用者を別の部屋に移し、D男さん一人の部屋にしました。また物音に敏感に反応するようになっていたので、廊下にあった洗濯機を別の場所に移したりもしました。そして何でも一人でやろうとするD男さんに、職員が気軽に、自然に無理なく近づき触れ合えるようにと思い、手足の肌荒れにクリームを塗ってみるなどのスキンケアを行うようにしました。

そしてこれ以降、約八カ月間、職員が交代でD男さんに個別に付き添って生活することになりました。

D男さんに個別に担当者が付き始めてから、D男さんは、人が集まるところを避けるかのように、食事を自室か作業室に職員に運んでもらい、食べるようになりました。ベッドで寝ていても、他の利用者のパニックの音が聞こえてくると、布団の中から力の入ったうなり声を出したり、うたを唄ってそれをう

ち消すかのようにしていました。布団の中で一見眠っているかのように見えても、絶えず周囲に対して警戒しているようでした。

この頃、活動には参加しなくなり、皆が活動に出て施設内が静まると、部屋から出てリビングルームに行きテレビを見て過ごし、皆が戻ってくるとまた自分の部屋に戻っていました。このように周囲の人に対し回避的であっても、D男さんが寝ているときに添い寝をすると、職員の一部に自分の体の一部を軽くくっつけてきたり、テレビを見ているときにそーつと後ろから抱っこすると身を委ねてくるなど、人に対して甘えたいといった気持ちもあることが肌で感じられました。

五月の連休で帰宅中、昨年と同じように家の中にある電化製品を壊し、食器を割り、服を破るなどの激しい破壊行動が起こってきたので、連休の途中で施設に戻ってきました。母親は「D男は、家では父親のことをとても気にしていて、ちよつとした父親の動きにも敏感に反応し、おどおどしているように見える」と話していました。そしてこれ以降、約一カ月間週末帰宅を中止し、施設に残ることになり、かわりに両親が週末に施設に来て、宿泊することになりました。

その後も職員が付き添っていましたが、職員が少しでも目を離すと、D男さんは視野に入った物を壊したり、壁の張り紙をはがした

り、周囲の物音に反応して耳を塞ぐなど、あらゆる刺激に過敏に反応していました。

しかし、他の利用者が作業などに出かけ施設内が静かになると、付き添っている職員と言葉遊びをするようになったり、のんびりと過ごすこともできるようになってきました。

一カ月ぶりの帰宅後、母親は「物壊しこそなかったが、洗濯を何回もするなど落ち着きがなかった」と話していました。

少しずつ職員との言葉遊びが増え、落ち着いて過ごせるようになってくると、今度は付き添っている職員の注意が自分からそれるとすかさず物に手を伸ばし、「ちゃんと見ていないと何かをしでかすぞ」というような仕草を見せるようになりました。絶えず自分のほうを向いていてほしい、そんな気持ちの表れのように感じられました。

八月になると、それまで週一回の木工の活動のみ参加していましたが、それにも参加しなくなり、以後、作業活動にはまったく参加しなくなりました。

次第に警戒心が薄れてゆき、一人でも過ごせる時間が増えてきました。そんな時、付き添いの職員が離れていると、D男さんのほうから探してきてくれるようになりました。

この頃、表情にも変化が見られるようになってきました。かわいらしい表情や厳しい表情を見せたりと、以前よりも感情が表情に表

れ、職員側もD男さんの気持ちを察しやすくなってきました。施設でも家庭でもパニックや器物破壊は減少し、安定した生活ができるようになってきたので、個別で付き添うことがなくなりました。

Y十一年一〇月（職員の付き添いがなくても生活できるようになってくる）

この頃になると、食事は職員が食堂から運ぶのではなく、自分から食堂へ取りに行つて部屋で食べたり、落ち着いている時は食堂で食事をするようになってきました。しかし、食事の時刻になつても食堂に行かず部屋で待つていることがありました。食堂に行けない時もあるようです。そんな時D男さんに、「ごはん、どうする？」と尋ねると、「持ッテクル」と答えました。私のほうで食事を部屋まで運ぶと、嬉しそうな表情を見せてくれました。また、運んでも食欲がなく食べられないときには、「お腹がすいちゃうね。お菓子でも食べようか」と話し、部屋へお菓子を持つていくと、嬉しそうに食べます。こんな時は、職員とのちよつとしたかわわりを待つているように思えました。

入浴も、これまでは多くの利用者が入る時間に皆と一緒に入れず、私が個別で付き添い日中入っていたのですが、この頃になると自分から皆と一緒に入るようになってきました。

た。しかし、やはり何か不安な時にはD男さんのほうから私のところにやってきて、「風呂ハイル」と、聞こえないくらい小さな声でぼそぼそと話します。そんな時は終日付き添っていた時のように、他の利用者が利用しない日中に私が付き添いながら入ります。

このように、自分で生活を進めながらも困った時にはD男さんのほうから職員の方へとやってくるようになり、パニックを起こすことも少なくなってきました。

また日中の活動には参加せず、皆が活動に出て静かになるとリビングルームに来て、一人でテレビを見て過ごしていました。

家庭では、これまでも母親とは言葉遊びをしたりして甘えていましたが、ますますべたべたと甘えるようになり、あれほど緊張していた父親に対しても、父親が運転する車の助手席に座るようになったり、母親とやるような「〇〇する？」「ソレハペケデス」といった言葉遊びをやるようになってきました。そして母親は「毎週帰宅するたびに薄皮を一枚一枚はがすようにD男が変わつて、良くなつていくのがわかります」と話していました。

四月の中旬頃より、D男さんにとつての衣替えの時期になると、なかなか着る衣服が定まらず、落ち着けない様子でした。家でも施設でも買ったばかりの衣類を二回着ただけではさみで切つてしまい、他の利用者の衣

類を着て週末に帰宅し、再び購入してくる、ということを繰り返していました。そのうちに、週の半ばで私のところに「ズボン、シャツ」とぼそぼそと話しに来るようになりました。その様子から、どうやら服を全部切り捨ててしまい、週末まで待てないのでなんとかしてほしい、そんなD男さんの気持ちがあくみ取れたので、「お母さんに、宅急便で服を送ってもらおうように電話するよ」と話をすると納得し、家から送られてくるのを待つようになりしました。

そんなことを何度か繰り返しているうちに、今度はD男さんが家から持ってきた余分な服を私のところへ持ってきて、「半ズボン、Tシャツ、引越シ」と言ってきました。私は、今度はこれを自宅に送り返してほしいのだなと感じたので、衣類を箱に入れ、家に送り返す準備をしました。D男さんはその様子を見つと見ていて、とても満足そうな表情を見せていました。

衣類のことに限らず、買い物に行っても自分の思っていたような買い物ができなかった時は、もう一度行きたいことを訴えに来て、そして再び私と一緒に買い物に出るといふことも、この頃はよくありました。

このように、D男さんは自分が今困つていたり心配していることを伝えようとしていたり、自分がしてもらいたいことを要求するように

なってきました。

職員から離れ、自分一人で生活するようになり、個別で付き添っていたときよりもかわりが薄くなってくると、職員に相手をしてもらいたいようで、用もないのにふらりと指導員室にやってきました。私がそれとなく「お茶を飲みますか」「少しお菓子を食べますか」と聞いてみると、待つてましたとばかりに嬉しそうな表情を見せてくれます。自分で色々やるようになったぶん、甘えなくなったり相手をしてもらいたい気持ちが湧いてくるようでした。

この頃から、他の利用者との間でテレビのチャンネル争いや本の取り合いなどのトラブルが起こったり、イライラしている様子が見られるようになり、再び物壊しやパニックが起きるようになってきました。

家庭では「生活のパターンが変わってきたが、表情は明るく、大きな声は出さなくなってきました。そして、父親とうまくいつている時には自分(母親)のところへは来ないが、少し心配になってくるとべったりとくっついてきます。子どもの頃は、まったくこのように甘えることはありませんでした」と、母親は話していました。

Y十三年八月頃(再び終日職員が付き添う)この頃から、再び物を激しく壊すようにな

り、日中は私が付き添い、夜は職員が交代で付き添うようになりました。

物を壊すことは付き添うことで減りましたが、D男さんの状態は以前物を壊していた頃と同じような状態でした。利用者が活動に出て施設内が静かな時には落ち着いています。が、利用者の声が聞こえてくると、その声を打ち消すかのように声を出し、両手で耳を塞いでいました。そしてある特定の利用者の声を聞くと、「ギャー!!」と叫び、壁を激しく叩くということもありました。時計を見て時刻をとて気になったり、突然「学園卒業」などと言いだしたり、かつて自分が通っていた施設や授産所の名前を言ってみたり、何か辛いことを思い出したように涙を流して泣くなど、とても落ち着かない状態でした。

D男さんの希望で買い物外出をしても、何かに駆り立てられて行かなくてははいけないと思つていような様子で、楽しんで行くといつた状態にはとても思えません。付き添うようになった初めの頃は、日中、利用者が集まっているところへは出て行くことができず、ベッドに潜つていることがほとんどでした。そんな時一緒に横になつてみると、D男の足や手が、そーっと私の体に触れてくるようになりました。人に甘えたいという気持ち

少し落ち着いてくると、利用者が集まって

いるリビングルームでテレビを見るようになってきました。初めは壁に寄りかかって見ていましたが、そのうちに部屋のなかほどでちょんと座るようになり、私が近づき後ろにまわると、「抱っこしてもらいたい」というように私に寄りかかってくるようになりました。そして二人きりの時だけでなく、他の利用者がいるところでも、私に体を委ね、甘えてくるようになってきました。

しかし、それ以外の食事、洗面、排泄、入浴などの日常生活全般において、非常に細かいD男さん特有の決まりごとが数多くあり、それが順序立ててできない時には、何度でもやり直ししなければ次に進めず、とても大変そうに見えました。

付き添うようになって二カ月目頃から、それまでは起床してから夜寝るまで自分の部屋に戻ることはありませんでしたが、午前中、利用者が活動に出た後、自分の部屋に戻って再び寝るようになり、食事の時間になっても起きなかつたりと、「〇〇しなければならぬ」という強迫的な気持ちで緩んできた様子がうかがわれました。

付き添うようになってから三カ月目頃から、それまで利用者のいないところで過ごしていました。三カ月ぶりに誕生会の場に多くの利用者と一緒に参加できました。その後、リビングルームで一人で過ごせるように

もなってきました。

それまでは、日常生活の中で自分の思い通りに事が運ばなかった時、「アー、ダメダ」とか「頭が痛い」などと言ってその後物に当たったり、壊すことが多かったのですが、私がテレビの番組のまねをして、「怒ってはなりません」などと言うと気分が変わったり、自分でヒーローのものまねをして、「変身！」などと言って気持ちを切り替え、さつさと事を進めていけるようになってきました。

D男さんは、日常生活の中で職員にやってほしいことは、それまでほとんど私に頼んできていましたが、他の職員にも頼むようになり、少しずつ私の手助けを必要としなくなり、自分一人で過ごすようになってきました。

家庭では「父親はD男の要求を聞き入れ、買い物や外食に行くようになり、以前よりも関係がよくなってきた。D男の父親に対する緊張も緩んできたように見える」と母親は話していました。

Y十三年二月頃（家庭でも落ち着けない）

D男さんは自分一人で過ごすようになる。周囲の刺激に敏感になり、再び物を壊すようになり、職員がしばらく付き添うことで落ち着き、D男さんの

ほうから「指導員室」と言って、もう離れても大丈夫だということや伝えてくれるようになり、その頃はちょうど冬、休み前ということもあり、私には何か不安で心配そうな感じに見えました。

D男さんのほうもそれとなく職員の様子を気にしているようで、食事中など、他の利用者の世話をしているとチラチラとこちらを見たり、D男さんが食堂から食事を持ってリビングルームへ移動しようとする時、その後を付いていかないと非常ベルを押したりすることがありました。他の場面でもこのようにことが見られ、職員に付き添ってもらいたい気持ちもあるが自分一人でやらなければならぬという思いも思っているような様子でした。

そしてこのような状態がこの後も長く続き、その間は刺激（特に人の声や動き）に敏感に反応したり、自分の行動にもこだわり、何度も同じことを繰り返したり、突然涙を流して泣いたり落ち着かない状態になっていました。

実はD男さんが私の手助けを必要としなくなった頃から、私は他害のある別の利用者に付き添うことが多くなっていました。そんな時でもD男さんの様子がわかる位置にいましたが、このような私の動きもD男さんにとっては不安になる要因だったかもしれません。そして週の活動の日課として買い物時間が

あるのですが、それまでは私と一緒に  
行っていました。この頃から他の職員を自分から  
指名して出かけ、買い物に行く時にも私から  
離れるようになりました。

しかし、パニックの後や何か思い通りにな  
らなかつた時に、気持ちを切り替えるように  
買い物に行くことがあるのですが、そのよう  
な大変な時には私のところまでやってきて、  
「〇〇へ行く」と訴えに来て一緒に出かけて  
いました。

家庭においても両親が仕事をしているた  
め、一人で過ごさなければならぬ時間帯が  
あり、その時に色々な物を壊すようになって  
きました。母親は「D男を家に一人きりで留  
守させることに不安を感じているが、毎週  
の帰宅のたびに仕事を休むわけにはいかな  
い」と話していました。

そして春休み中、D男さんは一人で留守番  
をしていた時に、近所の家の窓ガラスを割り  
ました。二年ぶりのことでした。両親は「過  
去の激しい器物破壊を繰り返していた頃のこ  
とがよみがえり、不安な気持ちになった」と  
話していました。この後も家庭では、ニコニ  
コと笑っていたかと思うと急に涙を流して泣  
く、というような、感情の起伏の激しい不安  
定な状態が続きました。

施設においてもD男さんは落ち着けない状  
態が続く、週末に向かうにつれて（帰宅を目

前に）不安やこだわりが強くなりました。利  
用者との間でもトラブルが生じやすくなり、  
物を壊すということが起こってききました。し  
ばらくの間、作業活動に参加していなかった  
のですが、再び自分から参加し始めました。  
その様子を見てみると、自分から自発的にや  
りたくてやっているようには見え、やらな  
ければならない、というような何か他の力に  
よって動かされているように見えました。

そんなある日のことです。その日はD男さ  
んがとても落ち着かなかつたので、久しぶり  
に私が付き添っていました。ただ、どうして  
もD男さんから離れなければならぬ用があ  
り、少しの間だけとD男さんにも断って離れ  
ました。しかし私が戻ってくると、D男さん  
は私の顔を睨みつけながら、次々と部屋を巡  
ってタンスの扉やカーテンを壊してまわりま  
した。その破壊の様子は、他の利用者が行う  
器物破壊の様子とは異なっていました。単に  
「しっかり付いていないとこうなるぞ」と私  
に言っているだけでなく、その激しい動きと  
凄まじい形相から、今まで長い間、D男さん  
が押さえ込んでいた、人に対する強い怒りや  
憎しみや恨みといったような気持ちを爆発さ  
せているようにも見えました。私は思わず  
「悪かった、もうそれくらいでいいだろう」  
と言っていました。いつもなら抱きかかえ  
たりすることで興奮が治まるといった具合でし

たが、この時はこの言葉かけだけで、ムツと  
した顔をしながらも治まっていきました。

ゴールデンウィーク休暇になり、家庭でパ  
ニックが起きました。母親は「父親とD男  
との間で緊張が高まりパニックになった」と  
話していました。これ以降、母親は「D男が  
不安定になったりパニックになるのは、父親  
がD男にかかわる時の態度に原因がある」と  
一方的に決めつけることが多くなりました。

このような両親の元では、その雰囲気はD男  
さんにも伝わり、家庭に帰っても落ち着けな  
いように思えました。

Y十四年六月頃（女性職員とかわるようにな  
る）

依然として、生活全般において、何かに駆  
り立てられているような行動が続いていまし  
た。週末帰宅の時も、家で落ち着けず、早々  
に施設に戻ってくるという状態が続いていま  
した。

そのような中、特定の女性職員に関心を示  
すようになってきました。毎朝「おはよう」  
と声をかけてもらい、握手もできるようにな  
り、そして入浴後には顔や手足にクリームを  
塗ってもらうようになってきました。その時  
の様子は、私が同じようなことをしていたと  
きとは違い、恥ずかしそうにしながらも、と  
ても嬉しそうな表情をしていました。

そのうちにその職員がいることがわかると、遠慮気味に近くに寄ってきて、気づいてもらい、そのような世話をしてもらおう、といったことが見られるようになってきました。その姿は、女性職員に甘えたいといった様子にも見えましたが、異性として関心をもって見るようにも見えました。過去にも、女性職員との間では素直に遊び甘えるといったことがありましたが、男性職員との間では、このように素直に甘える様子は見られませんでした。

そしてこの特定女性職員とのかかわりが増えてくると同時に、他の女性職員とのかかわりも増えていきました。D男さん自身が落ち着かなくなったり、かかわってもらいたい時、大きな声で女性職員の名を呼びながら自分の部屋に入っていきます。呼ばれた職員がD男さんの部屋に行くと、D男さんは体をくっつけてくるなど、小さい子どもが不安になった時にお母さんにするような振る舞いをしていました。

このように、女性職員と一緒に過ごすようになり、D男さんも素直に甘えられるようになってくると、かかわる女性職員のほうもD男さんの気持ちに少しずつ理解できるようになっていきました。そしてしばらくすると、D男さんの物を壊そうとするときの行動に変化が見られるようになってきました。これま

では、D男さん自身、自分ではどうすることもできずに衝動的に物を壊すといった状態でしたが、この頃になると女性職員の存在を確認して「アアー！」と声を出し、職員がD男さんに目を向けると、非常ベルを押ししたりカーテンを引きちぎったりするようなことが何度も起こるようになってきました。そんな様子は、自分のほうを向いてほしい、相手をしてほしい、と言っているようにも見えました。他の利用者がいない時など、自分の部屋の入り口に立って女性職員のほうをじーっと見ていたり、何かを呟き自分のことを気づべてもらいたい様子を見せ、その職員がD男さんのところへ行くと、部屋の中で「非常ベル押ス、カーテン壊ス」と注意を引くようなことをわざと言いました。職員に「離れないでここにいてほしい」といった気持ちをそのような形で表しているようでした。

このように女性職員とのかかわりも増え、甘える姿もよく見られるようになり、物を壊すことは減ってきました。この間、私は他害のある別の利用者につき添いつつもD男の様子がわかる位置にいるようにしました。そして女性職員が大変そうになった時には駆けつけてD男さんの相手をしたり、女性職員の手助けをしていました。

しかし、このような姿をみせるようになってきて、D男さんは依然として生活全般に

わたり決まりごとが多く、それらをせき立てられるようにしてこなしているような生活ぶりが続いています。

Y十四年九月頃（駆り立てられるように作業に参加する）

この頃から色々な作業活動に少しずつ参加するようになっていましたが、ある活動に参加している最中に、他の活動のことを気にするような発言があり、あれもこれもやらなくてはならないと思っているようでした。作業活動に対しこのような気持ちになったのは、一つには施設の先の予定に、保護者が見学に来る「作業見学会」があり、そのことを意識して、親に頑張っている姿を見せたいという思いがあったように思えました。小さい頃からの厳しい訓練や、施設入所時に親から言われた「仕事がつかりできるようにしたら家に帰れる」といった言葉に代表されるように、両親の「D男が仕事ができるようになり、自立できるようになれば……」といった気持ちや期待に応えようと、D男さんは必死になっていたようです。

色々な活動に参加しているD男さんの様子から、私にはD男さんなりに「一生懸命やらずに生きては」と思い、精一杯頑張っているように見えました。甘えたい気持ちと、仕事して自立しなければ、という気持ちの間でこころ

が揺れ動いているようでした。そしてそのことがだんだんと負担になってきたのか、パニックや物壊しが起きるようになってきました。しかし両親は、D男さんのこのような状態に関しては気にする様子もなく、見学会の後、「本当によかったと思いました。あんなに張り切ってにこにこ笑いながら作業する姿、〇〇施設以来のことでした。仕事、作業することは嫌いではなく、むしろ好きなほうなので、落ち着けばしつかり作業が続けられると思います」と感想を述べていました。

しかし、D男さんが帰宅した時、両親は絶えず「いつ何をしてくすかもいけない」といった不安な気持ちでD男さんを見ていたようです。D男さんの、家庭あるいは両親を想う気持ちと、両親のD男さんを想う気持ちにズレを感じました。

半年後、再び作業見学会がありました。しかしこの時は、D男さんの両親は会社を休むことができない、ということと欠席しました。D男さんは、両親が見学会は欠席するということを知らされるまでは作業に参加してその日に向けて頑張っていました。欠席のことを知ってからには作業には出なくなりませんでした。見学会の時には両親は出席しませんでした。D男さんは活動に参加しました。そして、見学会の前後の時間帯で、D男さんが一人になってしまうと激しく物を壊すというこ

とが起きました。両親が見学会に来ないことがわかっていても、やらなくてはならないという気持ちが強く働いているように思えました。

そしてこの週末の帰宅時にパニックになりました。母親はその声が近所に聞こえることを恐れ、また近所のガラスを割るのではないかと心配していた、と話していました。

D男さんは両親の期待に応えようとして甘えたい気持ちがあるのに、両親は仕事があるって休めないといったり、D男さんの言動に対して恐怖を抱いていたりと、この時のD男さんの気持ちは、両親から突き放されたような気持ちになっていたのかもしれない。

Y十五年四月（D男の気持ちは職員に向かうが落ち着けない）

父親が再び以前関係していた授産所に勤めるようになったことも、D男さんに少なからず影響しているようで、「活動に参加しなくては」という気持ちが強く働き、午前も午後も活動に参加していました。しかし、活動に参加する前には不安が高まるようで、物を壊してしまったり、女性職員の名前を呼んで、付き添ってもらいたい様子をみせることが多くなってきました。

女性職員が付き添うと、活動のことや週末帰宅のことなど、D男さんが心配しているこ

とを次々と話してくるようです。しかし付き添っていても、徐々に悶々とした気持ちが膨らみ、ついには、付き添っていた女性職員に殴りかかって暴れることもあり、そのような時は男性職員と代わることでD男さんの気持ちがすーっと鎮まりました。D男さん自身もいけないことをしてしまったと感じているようで、自ら気持ちを鎮めているようにも見えました。その後再び女性職員が付き添うとD男さんのほうから言葉遊びをもちかけ、先ほどの険しきは消えていきました。

次第に物を壊すことは減り、女性職員を呼ぶことが増え、大変なときにはそばに付いてほしい、という気持ちが強く表れるようになってきました。しかし、そういった時の職員を呼ぶ様子が、パニック寸前のような感じだったり、付き添えば暴れるなど激しい状態なので、付き添う職員も大変でした。

家庭においては、帰宅するとすぐ、施設に帰る仕度を始めたり、夜中に起きて家を出てしまったりと、落ち着けないことが多くなっていました。そんなD男さんの様子を見て、母親は連絡帳に「以前のパニックや破壊行動を思い出し、不安になります」「朝まで何とか無事に過ぎてくれれば良いのだけれど」などと書いていました。そのような母親の状態を見て、D男さんはますます落ち着かなくなりました。そして家から電化製品、生活

用品、食品など、あらゆる物を施設に持つてくるようになりました。D男さんのそんな様子は、家庭に自分の居場所がなくなったので、施設に居場所を移しているかのようにさえ見えました。

まもなく、父親が病気になるため、週末帰宅が困難になりました。

Y十五年七月（父親の病気で週末帰宅ができなくなる）

帰宅ができなくなった最初の週は、D男さん自身、父親の病気や入院の事を受け入れられなかったのか、私が父親の事や週末帰宅ができないことを話すと、それを打ち消すかのように、「明日（僕ハ）家二帰ル」というようなことを言ってきました。そして金曜日になり、明日他の利用者は帰れるけれど自分は帰れない、ということを感じ取ると不安になり、ギョアギョア騒ぎながら施設内を走りまわり、普段かかわることの多い女性職員を見つけ出し、付き添ってもらっていました。女性職員が付いていても、衝動的に暴れだすことが多く、この日は大変でした。しかし翌日の帰宅日になると、諦めたのか昨日の興奮はうそのように静かに過ぎていきました。

週末、多くの利用者が帰宅し、施設内には帰宅することのできない数人の利用者が生活していました。普段かかわることの多い女性

職員がシーツ掛けをしていると、D男さんがやってきて、その傍らで時折「非常ベル押ス！」などと言っては職員の注意を引きながら、終始穏やかな表情で、職員の仕事に付き合っていました。D男さんは、父親の病気や入院のことが心配で、心細かったのかもしれない。そしてこの時のD男さんの様子を、この職員は「小さな子どもが心細くなってお母さんに付いてまわっているようだった」と話していました。

この後、この職員や他の女性職員の存在を確認するような発言が増えてきました。「○サン何時」「△△サン明日来ル」など、いつ出勤してくるのかということを確認するようになり、聞くことがありました。そして付き添っている時に衝動的に暴れることが減り、職員の関心を引くような、わざとらしい行動を取ることが増えてきました。

週末帰宅ができなくなつてから、以前に比べ落ち着いた生活ができるようになってきました。活動への参加も、出たり出なかつたりと、強迫的な感じが薄れてきたように見えました。しかし、週末に近づくにつれ、あるいは保護者会のために保護者が来所するような時（D男さんの両親は欠席）など、家に帰りたい気持ちや両親に会いたい気持ちが湧いてきて、落ち着かなくなり、物を壊すことがありました。しかしそのような時も、職員が付

き添い、「お父さん、入院して来て来れなかつたね。会いたかつたね」などと話すことで落ち着きました。

そして、何かと職員の気を引こうとする行動が見られるようになってきました。帰宅できない寂しさからか、女性職員にそばにいてほしい、という気持ちが強くなっていったようです。

Y十五年九月（作業見学会）

作業見学会が行われる前から、その日のために活動に出ていましたが、以前のように、駆り立てられるようにあれもこれもやらなければといった様子はなく、パニックもありませんでした。見学会には母親が来ていましたが、D男さんは淡々と活動に参加していましたが、それ以後、活動への参加は徐々に減っていき、施設内に残ることが多くなっていきました。

Y十六年二月（日帰りの一時帰宅）

家に帰りたい気持ちが強く、D男さんは家の様子や父親のことなども心配していたので、一時帰宅をすることになりました。何の混乱もなく当日を迎え、車内でも家の中でも落ち着いていました。父親の様子や家の様子などを見て、D男さんなりに安心したのか、ほっとしたような表情を見せてくれました。

二時間の帰宅でしたが、施設に戻る時刻になると、家にいたいとぐずすることもなくD男さんのほうからさっさと車に乗り込みました。一見淡淡とした彼の行動がとても印象的でした。

その後、父親の状態が良くなってからは、母親が時々施設に来所し、D男さんの部屋で宿泊するようになりました。初めの頃はべたべたと甘える姿もみられましたが、徐々にその姿は見られなくなりました。

Y十六年八月(家庭との距離を置く)

ふだんかかわることの多い女性職員を独占できるような状況の時には、その職員のところまでやってきて、目をじっと見ながらいたずらっぽいことをしたり、今までD男さんが言っては叱られてきたことをわざと言って職員から返ってくる言葉を聞いて楽しんでいたり、付きまといたずらをして気を引こうとしたり、さらにはその職員が施設内の片づけ仕事をしている時にお手伝いを試みたりと、絶えず相手をしてもらいたい様子を見せるようになりました。その職員が休みの時には部屋で過ごすことが多く、他の職員とのかわりをもたずに静かに過ごしていました。そして翌日、その職員が出動してくると、顔を見るなり、言葉遊びやいたずらをして相手をしてもらっていました。活動の時間になる

と、その職員は担当する作業にいつてしまいましたが、D男さんはリビングルームでテレビを見たり、部屋でのんびり過ごすようになってきました。

このようにしてD男さんは、今では学園で安心できる職員とかかわること次第に落ち着いて過ごせるようになってきています。しかし、利用者の帰宅する様子や他の保護者の姿を見ることで、両親を想う気持ちや会えないことの寂しさから不安定になるのを見てみると、職員はD男さんと良いかわりがあるようになって、両親の代わりにはなり得ないことを感じ、D男さんの両親へ寄せる複雑な想いを想像すると、施設の役割の限界を痛感させられます。

#### 援助過程を通して考える

この報告は、原氏をはじめとする当該施設職員による、非常に根気づよい、丁寧な臨床実践の取り組みである。<sup>(1)</sup>常にD男の気持ちに焦点を当てたかわりをもち続けていくなかで、D男のこころの変化が次第にあきらかになっていくさまが手に取るように伝わってくる。

#### 動因的葛藤行動としての破壊行動

援助過程の冒頭から、食事にまつわる大変

衝動的なエピソードが語られている。食事という本来ならば本能欲求を満たしてくれる楽しい生活習慣であるはずのものが、D男にとっては何かの力によって動かされているという苦痛な体験となっている。

本能欲求が高まるとそれを制止しようとする力が働くことによって強い葛藤状態に陥り、その反応として激しい行動障害がもたらされているのである。<sup>(2)</sup>

#### 何かによって動かされる体験

このような葛藤行動とともに重要なことは、本能欲求に対して強い葛藤状態が生じることによつて、非常に深刻な病態が生まれていることである。D男自身、自分の意思で行動をとるといふことはほとんどなく、いつも何かの力によって動かされているという深刻な自我障得である。

D男の激しいパニックの背景には、そのようなこころの動きをみてとることができる。それは日常の作業活動のみならず、食事をはじめとする多くの本能欲求に基づく行動においても認められている。いつも何かの力によって動かされているという主体性の失われた心的状態である。

#### 過剰適応

このような深刻な自我障得と表裏一体をな

しているのが、短期入所の際に認められた過剰適応を思わせる集団場面での振る舞いである。黙々と働き、一見すると良好な適応を示していると思われがちな彼らの内面には、実はこのような自我状態が働いているのだというところを、われわれは常に念頭に置いておく必要がある。

「コワイ、コワイヨ、オコシレタ、コワシチヤッタ、コメンナサイ」

D男が頻繁にパニックを起こしている時に思わず発したことばは、彼の抱えている不安や恐怖がどのような性質のものかを推測させてくれる。

先に述べたように、D男は常に何かによって動かされているという自我状態にあるが、それは周囲の力に圧倒されて主体性の失われた心的状態である。このような状態にあっては、わずかな変化も彼にとつては強い不安を引き起こすために、自分のとる行動のパターンを崩されたりすると、激しいパニックが引き起こされている。ここで起こるパニックや器物破壊行動は、彼自身の意思でとつた行動ではなく、無意識的、本能水準、ないし自動水準で起こった行動である。しかも、その行動が生じた後に自分のとつた行動に気づくことになる。彼の中に罪悪感だけが増幅していくことになる。さらに周囲の他者から厳しい

叱責を受ける。救われようのない彼の不安な事態は、ますます深刻さを強めていくことになる。このような悪循環が、行動障害を呈する人々と援助者とのあいだに生まれやすい。

#### 抱っこによる安心感

このような極度に強い不安な状態にあるD男に対して、担当職員は抱っこなどを通して優しく保護的にかかわっている様子がよく伝わってくる。D男に対する援助は、一貫してこのような愛着関係を育む方向で実践されていくが、その過程で次第にD男は職員にこころをよせていくようになっていく。

しかし、このような援助実践はさほど平坦な経過を辿ってはいないことがこの六年半の長きにわたる援助経過に示されている。D男の甘え（愛着欲求）という本能欲求が職員あるいは家族に対して高まっていくと、葛藤が強まり、激しい破壊行動が誘発されていることが幾度となく示されている。このような葛藤行動は常に消長を繰り返し、容易には治まらないことも示されている。

#### 気持ちに焦点を当てることが援助の基本

担当職員の援助のあり方を振り返ってみると、常にD男の気持ちの動きに焦点を当て、それに沿った対応に努めていることがわかる。このことはさほど容易なことではなく、

D男のかすかな身体やこころの動きを繊細に感じ取っていくことによって初めて可能になっている。D男の身体面のきめ細やかな観察やさりげない身体接触を通してのD男のこころの動きを察知するという配慮が常に行き届いていることを経過から感じ取ることができ

る。原氏はさりげなくD男の気持ちを感知取って対応しているように述べているが、このような対応が可能になっているのも、施設内でのD男と生活をともにする中で、D男のこころの動きを肌で感じ取ることができるといふ、情動水準の気持ちの響き合うような関係が生まれているからに他ならない。そのような関係が生まれてきたからこそ、D男は担当職員にこころを寄せることができるようになってい

#### 家族とのあいだの関係障碍

原氏が最後に述べているように、たしかにD男は職員とのあいだで次第にこころを寄せて甘えを見せ、比較的平穏な生活を送るようになってきている。しかし、D男にとつてもっともこころのよりどころとなるはずの両親との関係においては相変わらず、強い緊張が生まれやすく、一触即発ともいえるような事態から容易に脱することはできないままである。このことは親子双方にとつて今でも重い課題

として残されている。

強度行動障害に対する関係支援を実践していると、困難な課題ではあっても職員とのあいだでは愛着関係が深まっていくことは少なくないが、ボタンのかけ違いから生まれた親子間の関係障害はこじれにこじれ、容易には修復できない深刻さをもっている。この事例に限らず、強度行動障害がからむ場合には、親子双方にそれが外傷的体験となつて根深く残存していると考える必要がある。

乳幼児期に生じたボタンのかけ違いを少しでも早く修復していくことは、その後の親子双方の長い人生を考えた時、よりいっそうの重みをもってわれわれに迫ってくる。

おわりに

これほどまでに丁寧な援助実践が継続的に行われても、いまだ深刻な自我障害が残存していることを考えると、自閉症の人々への援

助のあり方を真剣に問い直すことが必要なのうにも思う。彼らの気持ちのありように焦点を当てるような臨床実践はきわめて乏しく、多くの場合、彼らの行動(障害)や能力障害に焦点が当てられ、望ましい適応行動や適応能力を身につけさせていくような、「何かをさせる」という指導方法が取られやすい。

自閉症の人々には、こうした「させられる」という体験が日々蓄積され、彼らにとつてきわめて苦痛なものとなっていることを考えると、彼らの気持ち(情動)を大切にしたい援助実践の重要性は、強調しても強調しすぎることではないように思われる。

今回示した強度行動障害事例のみならず、高機能広汎性発達障害においても同様の自我状態にあることが確かめられつつあるが、彼らの主体性を重んじるという福祉理念が空文句になっていないか、顧みることも必要ではないかと思う。

(文献)

(1) 原鉄男「具体的な事例を通してー青年期・成人期(2)激しい行動障害を呈した自閉症者への関係支援とその後の回復過程」(小林隆児、鯨岡峻編)「自閉症の関係発達臨床」一八二―二〇七頁、日本評論社、二〇〇五年

(2) 小林隆児「自閉症と行動障害ー関係障害臨床からの接近」岩崎学術出版社、二〇〇一年

(3) 小林隆児「広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討」『精神神経学雑誌』一〇二巻八号、一〇四五―一〇六二頁、二〇〇三年

(4) 小林隆児「主体性をはぐくむことの困難さと大切さー幼児期と青年期をつなぐもの」『そだちの科学』五号、三五―四一頁、二〇〇五年

(5) 小林隆児「青年期アスペルガー症候群への心理的援助」『教育と医学』五四巻五号、四四六―四五五頁、二〇〇六年

(こばやし・りゅうじ／児童青年精神医学) (はら・てつお)

からだの科学選書

現代の医学・医療をわかりやすく説く不朽の名著！

# 精神科治療の覚書

中井久夫 [著]

精神科の患者ととりくみ、治療の厚い壁に挑んだ長い年月の、苦行ともいえる実践からにじみでた泉のようなメモワール。説得力ある記述と、随所にちりばめられた機智と洞察、治療の曲折を語ってなお医療の本質に迫る。

精神病院とタムの話  
身体のリズムと睡眠のリズム  
回復のリズムと治療のリズム  
治療の滑り出しと治療の合意  
服薬の心理と合意  
発病の論理と寛解の論理  
治療のテンポと律速過程  
急性精神病状態―心理的なことから  
急性精神病状態―生理的なことから  
診断・分類・初期治療  
治療を決めるもの

入院治療を決めるもの  
往診のすすめ  
精神病院開放化の視点変換  
気働き文化の力  
急性精神病状態の治療原則  
―家族への援助  
急性精神病状態の治療原則  
―患者への援助(1)(2)(3)  
外来の工夫・入院の工夫  
精神科医についての断章  
あとがき

ISBN4-535-80403-6

四六判 2140円+税

日本評論社  
http://www.nippon.co.jp/